

メディア・コンテンツから街を見る！

— ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～ —

佐藤 匡*

小淵 蒼真** 清水 愛結** 早川 幸来**
藤田 翔大** 山根 舞夕** 吉野 敬悟**

Watch the City from the Media Contents !

— Road of Onari —

SATOU Masashi*

KOBUCHI Soma** SHIMIZU Ayu** HAYAKAWA Saki**
FUJITA Shota** YAMANE Mayu** YOSHINO Keigo**

キーワード：メディア・コンテンツ、川口市、ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～

Key Words: Media Contents, Kawaguchi City, Road of Onari

はじめに

きっかけは1本の映画だった。

鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース佐藤研究室では、様々なメディア・コンテンツからその裏の社会背景を読み解くという作業を行っている¹。

ある日、たまたま YouTube を視聴していたところ、お薦め欄に『ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～』という作品があることに気がついた。何か新しい時代劇映画の広告かなといった具合に余りに留めなかった。しかし、それからしばしばお薦め欄に掲載されているのを見て、もう少し注意深く見てみたところ、その動画を発信しているのが「川口宿・鳩ヶ谷宿・日光御成道まつり実行委員会」とあるのに気付いた。川口宿！鳩ヶ谷宿！日光御成道！どれも私（佐藤）自身に馴染みのある地域である。現在もよく訪れる地域である。お薦め欄に掲載されていた理由はどうやらここにあったようである。

さて、そういうわけで実際に視聴することとなったのであるが、これがまたよくできた映画である。内容如何については、この後、私の研究室の学生たちの作品紹介に委ねることとするが、とにかく私の知っている川口、鳩ヶ谷の魅力を私の知らない部分まですべて伝えているのに正直驚愕した。

先述したように、私の研究室では、様々なメディア・コンテンツからその裏の社会背景を読み解くという作業を行っている。そこで、この『ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～』を学生たちに紹介をしたところ、学生たちが非常に興味を抱くようになった。「是非、聖地巡礼したい！」聖地巡礼、つまり、映画のロケ地巡りである。パンデミックの真っ最中の2022年であるにも拘わらず、市役所産業振興課の職員の方のご厚意もあり、無事2回の「聖地巡礼」を行うことができた²。

私たちの大学の所在地である鳥取県鳥取市と、今回の『ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～』の舞台である埼玉県川口市は、大きな共通点がある。それはまったく同じ日である2018（平成30）年4月1日に中核市へと移行したことである。とはいえ、方や人口が日本一少ない県の県庁所在地の市、方や首都圏にある人口が中核市第2位の市、同じ中核市といえどもまったく違う特徴がある街である。

今回は、この『ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～』という作品から、埼玉県川口市を読み解いてみたいと思う。まさに、「映画から街を見る！」である。

* 鳥取大学地域学部地域学科

** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース佐藤研究室3年

一 作品の舞台埼玉県川口市について

今回取り上げる映画『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～³⁾』の撮影地である埼玉県川口市はどのような街なのだろうか。

川口市は埼玉県の南端に位置し、県内第2の都市である。荒川を隔てて東京都に隣接しており、県内では戸田市・蕨市・越谷市・草加市・さいたま市の各市に接する都市である。市の大部分が都心から10-20キロ圏内に含まれており、J R京浜東北線やJ R武蔵野線で都心からのアクセスが可能である地の利から人口増加が続いている。

2011(平成23)年10月11日には隣接する旧鳩ヶ谷市と合併し、2018(平成30)年4月1日には鳥取市と同時に中核市へと移行した。合併・移行後の人口数は、約60万人5千人と中核市の中では千葉県船橋市に次いで全国第2位の人口数でもあり、埼玉県内第2の都市となった。また、ここ数年は外国人住民が3万8千人にも増加しており、全国自治体の中では第1位の外国人総数である都市としても有名である。

川口市は首都圏に位置しているにも拘らず、自然豊かな土地を有しており、住宅ローン専門金融機関アルヒが発表する『本当に住みやすい街大賞⁴⁾』においては、2019(令和元)年から4年連続でランクインし、2020(令和2)年・2021(令和3)年においては、2年連続で大賞を受賞している。また、在留外国人数は2022(令和4)年時点で3万9000人を超えており、この数は全国第1位となっている。

川口市は、中央に芝川、東に綾瀬川、南に荒川が流れ、台地と低地からなる複雑な地形の中で、北側の台地では古くから植木や花木等の園芸栽培が行われ、南西部の低地では鋳物や織物、味噌等の醸造業が根付いている。川の恵みとともに、それらはものづくりの街の基礎となり、街の発展を支えてきた。中でも、江戸時代から発展してきた鋳物や植木等の産業は主要産業であるといえる。また、鋳物産業のきっかけとなったのは、江戸時代に栄えた『日光御成道』周辺である。

『日光御成道』とは徳川將軍による日光東照宮社参の宿場町であり、その周辺において全国有数の工業都市として成長を続け、「鋳物の街・川口」の名を不動のものにしている。川口市は以上のことを「あいうえおのまち川口」と称し、広報PRを行っている⁵⁾。具体的には、『あ』ら川(荒川)や芝川をはじめとする川の恵みに生まれていること、『い』もの(鋳物)産業が伝統的に現在も続けられているモノづくりのまちであること、『う』えき(植木)や花等、江戸時代から続く自然を大切にしたい取り組みをしていること、さいたま新産

業拠点となる『SKIPシティ』を代表とする『え』いぞう(映像)産業で、若手クリエイターの発掘に注力していること、徳川將軍日光東照宮社参の宿場町『お』なりみち(御成道)や川口『お』ーと(オート)レース場の存在を表している。

【あいうえおのまち川口】

あ	荒川、芝川、川の恵みに育てられたまち
い	鋳物、機械等、ものづくりのまち
う	植木、花、江戸時代から続くみどりのまち
え	映像産業、SKIPシティで新たな人材を育むまち
お	御成道、徳川將軍日光東照宮社参の宿場町 オートレース、時速150kmを超える迫力のバトル

二 作品解説

映画『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』の概要及び視聴しての考察、並びに作中に登場する撮影場所の概要について述べる。

なお、今回執筆を担当する学生の一部(清水・早川・山根)は昨年本研究室で、2度の現地視察を行った⁶⁾。その際に訪問した箇所については、エピソードを交えつつ記述していくこととする。

【写真1:『ロード・オブ・ONARI』のポスター】



1 作品の紹介

『ロード・オブ・ONARI ～未来へつなぐ想い～』は川口市全面協力の下、川口宿、鳩ヶ谷宿、川口市経済産業振興課内日光御成道まつり実行委員会の製作により、2021（令和4）年1月17日に川口宿 鳩ヶ谷宿 日光御成道まつり実行委員会のYouTubeチャンネルにて公開された埼玉県川口市を舞台に繰り広げられるハートフルコメディ映画である。3代将軍・徳川家光が日光東照宮へ向かう「御成道」で現代にタイムスリップしてしまうも、現代の川口の方々の協力を得て、川口発展のルーツである「御成道」の伝説を追う物語となっている。なお、全編を川口市で撮影しており、各所に川口名物が登場する等、川口らしさ全開の内容となっている。YouTubeで公開されている動画の視聴回数は、2023年6月3日現在4万回に迫る数字となっている⁷。

2 作品解説

（1）400年後にタイムスリップ！？

はじめは1640（寛永17）年。徳川家の3代将軍家光（以下「殿」とする。）は日光東照宮社参の道中、昼休憩に錫杖寺⁸を訪れた。

暑さが厳しかったその日、和尚が用意した香の物を口にしましたが、あまりの塩辛さにご立腹し、「こんな土地二度と来るか。御成道は取り潰しじゃ！」と和尚に襲い掛かろうとした。その瞬間、『カンカンカン』という甲高い音が耳に入ると同時に、殿は400年後の現代へタイムスリップする。

この作品において、カンカンカンと甲高い音が鳴るという効果は、『タイムスリップする瞬間』として扱われている。この作品では、殿が400年の時を超え、物語が進んでいくことから、極めて重要な場面転換の表現方法であると考えている。

「何じゃ、ここは。」400年後にタイムスリップし、現代の錫杖寺にやって来た殿は、以前居た時代には無かった背の高い建物が建ち並ぶ景色に驚く。ここで、住職とその娘である萌と出会う。そして彼らに、錫杖寺に代々伝わる『御成道伝説』の巻物の存在を教えてもらう。

以下、巻物に記述されている文章である。

『御成道伝説 三代将軍 徳川家光 錫杖寺にて実に四百年の時を超える御成道に眠る五つの寶鉄を集めそれを正しく使うべし さすれば再び時を超え江戸の世に帰らん』

巻物にはこの文章の他に、御成道の上に×印が5つ、殿と萌と思われる人物のイラストが記載されていた。ここで和尚から1つ目の寶鉄（ハウテツ）を手渡される。「5つの寶鉄を集めれば、必ず400年前に戻るこ

ができる」と殿は信じ、萌との旅が始まった。この作品における萌の存在は、旅のサポートという単純な役割だけではない。殿の寶鉄探しの旅に同行し、『萌が川口市内の魅力を再認識する』＝『視聴者も川口の魅力を、同じ目線で知ることができる』という効果を有すると考える。

○ ロケ地巡り1 宝珠山錫杖寺

真言宗智山派の寺院である宝珠山錫杖寺は、江戸時代に徳川家が日光東照宮へ行く際、昼食をとった寺院である。

錫杖寺は、740（天平12）年に聖武天皇の霊告によって御後の光明皇后の病平癒祈禱のため、僧行基を武州川口村に遣わすに際して、僧行基によって現在の位置に草庵が結ばれたと伝えられる。

【写真2：法珠山錫杖寺】

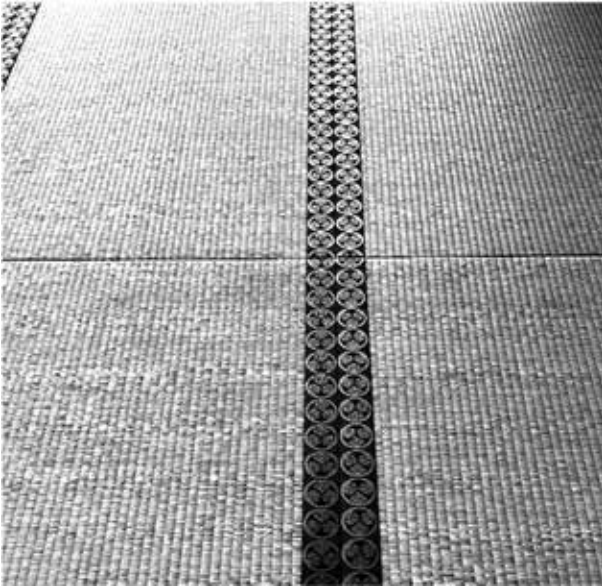


元和8（1622）年、徳川第二代将軍秀忠公が、日光社参の折（日光御成道）、御休息所となったことが元となり、徳川家と深い関りを持つようになったとされている。

錫杖寺本堂には、徳川の家紋である三つ葉葵が瓦や、畳縁等至る所で発見できた。江戸時代、三つ葉葵は徳川家が認めたところのみ使用を許されていたため、錫杖寺は徳川家公認の寺であったことが伺える。

また、三つ葉葵は徳川家の象徴であるため、三つ葉葵の縁を踏むことはもちろん、寺の柱1本を傷つけたり、汚したりするだけで、徳川を蔑ろにしたことと扱われ、処刑になるという厳しい決まりがあったといわれる。

【写真3：錫杖寺の畳】



1975（昭和50）年に設立された本堂の他に地蔵堂、川口天満宮等により構成されている。本堂は昭和50年に設立されたがそれ以前は、徳川十三代将軍家定公の寄進によるものだった。しかしながら、老朽化に耐えられず立て替えられた。日本では観音菩薩と共に広く人々の信仰を集め、釈迦入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩がこの世に現れるまで六道すべてを救済する仏として特に信仰を集めている。また、特に子どもを護ってくれる仏として広く信仰を集め、現在でも多くの子どもたちがご利益を授かるべくお参りに足を運んでいる。

錫杖寺の地蔵堂は初め門前にあったが、江戸期に当山が日光参詣の御休息所となったことから、門前を広くすることになり氷川神社の傍らに移され、明治の神仏分離令が公布された年に再び境内に移築された。地蔵堂内には、江戸期以前の開眼と推定される半跏の延命地蔵尊等、厨子に納められた秘仏が多く納められているが、石彫の坐姿地蔵尊をはじめ、令和を迎えて諸尊の中から護国鎮守を願い不動明王を常時御開帳し、縁日には地蔵尊護摩が修法されることから多くの信仰を集めている。

川口天満宮は天満宮とある通り菅原道真公を祀った神社である。鎌倉時代には正直者を守り、邪悪をころす神とされていたが、室町時代以降になると文学諸芸の守護神として厚い尊崇が寄せられた。

昨年5月に訪問させていただいた際には、錫杖寺所属の僧侶の方の御厚意で、普段であれば入ることのできないような内陣に入らせていただいたり、大きな鑄造の鐘や家光の大奥である瀧山が実際に乗ったという籠も見学させていただいたりした。

大奥最後の御年寄である「瀧山」が錫杖寺に葬られており、大政奉還の際、瀧山は250人の奥女中に拝領物を与え、江戸城大奥の最後の締めくくりを行った。江戸城から川口市へ向かうときに瀧山が利用していた駕籠は、錫杖寺で今も保存されている⁹。

【写真4：大奥最後の総取締「瀧山」の駕籠】



徳川家との繋がりを伺う中で、江戸から新川を挟んで位置する川口市の立地が守りにも適していたため徳川家が休息所として選んだという話があった¹⁰。都心から近く利便性の優れた土地であるのは約400年を経た今も変わらないのだと感じた。

『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』撮影時の話では、高層マンションが四方に建つ高層マンションが映り込まないように上から撮影したという人工物が映り込まないための工夫について伺った。

【写真5：錫杖寺から外を見た実際の風景】



さらに、作中では大名が畳の上にそのまま座り、他の人と同じ高さで座っていたが、本来は畳越しに下から狙われないよう厚い畳を敷いて座っていたという裏話まで聞くことができた。寺院の原点である祈りを重んじながら、寺院や川口の歴史を未来へ伝えるために、住職としての仕事や映画の撮影協力、SNS広報活動を行っているのだと感じた。

錫杖寺は弘法大師の再来と言われた印融法印ゆかりの寺院であり、談林所として多くの学僧の教育へ力を入れてきた。その伝統は現在の錫杖寺まで引き継がれ、御詠歌や寺子屋等を中心に学びを求める人々の中心の場となっている。寺子屋では談林所の原点に戻り、子どもたちの教育に力を入れている。技術の進歩が続く現代において、実際に寺で学び、泊まるという体験を通して普段とは違う生活の中で、多くの仲間とともに仏の教えを学び、未来へと活かすことを目的としている¹¹。

『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』では、この場所に家光が寄ったことから物語が始まることや、江戸時代と現代をタイムスリップする場所でもあることから、最も重要な役割を担う場所とすることができるだろう。実際に川口の歴史を語る上では欠かせない場所と呼ぶことができると考える。

（2）5つの寶鉄探しの旅

寶鉄探しのため、殿と萌が川口市内を歩いていると、風船が木に引っ掛かり、取ることができず泣いている女兒と遭遇する。殿が刀で枝を切り、無事に女兒の元へ風船を届けた。すると、その様子を動画で撮影していた男（実は、川口市役所産業振興課の伊奈課長）にSNSにて拡散され、殿は一躍川口市内の有名人となる。

2つ目の寶鉄は、巻物の絵と産業振興課の職員である藤枝の話から、地藏院¹²にあると推測。殿自身が汗水を垂らし地藏院の地面を掘り、2つ目の寶鉄を発見する。その後食べた香の物は、非常に美味しく感じる。

3つ目の寶鉄は、旧田中家住宅¹³隣の『春日』と書かれた一般家庭の中に、4つ目の寶鉄は、鳩ヶ谷大橋河川敷¹⁴に。どちらも川口の人々の力を借りながら、発見することができた。3つ目の寶鉄を発見した後は香の物を、4つ目の寶鉄を発見した後はビールを食し、殿は『頑張った後の飯の美味しさ』に気付く。

5つ目の寶鉄は、旧式の鉄を溶かす炉であるキューボラに×印があったこと、川口市のマスコットキャラクターである『きゅぼらん¹⁵』の手元に寶鉄が写った写真の存在から、『きゅぼらん』を探す展開に。川口オートレース場¹⁶や川口市立グリーンセンター¹⁷で『きゅぼらん』を追いかけ、遂に5つ目の寶鉄を手に入れ

る。

【写真6：きゅぼらん】



○ ロケ地巡り2 川口市役所本庁舎

川口市役所本庁舎は、殿が江戸の世へ帰るために産業振興課の職員の元へ相談に向かったり、一筋縄では帰れず思い悩んだ際に川口市内を一望する場面で屋上が使用されたりと、この作品内において何度も登場する重要な場所となっている。

【写真7：川口市役所本庁舎】



昨年の現地調査では、5月・9月ともに伺わせていただき、リアル産業振興課職員の方のご厚意で、シテ

イプロモーション事業の話や、外国人居住者数が全国1位であることから『多文化共生社会』の話を伺った。また、西川口の街並み『西川口チャイナタウン¹⁸』を案内していただいたり、庁舎内を見学させていただいたりもした。

○ ロケ地巡り3 地藏院

2つ目の寶鉄を探すため、殿が土を掘っていた場所が地藏院である。地藏院は、真言宗智山派の寺院であり、聖武天皇代(724-749)の創建といわれている歴史的な寺院である。特に、「追い風不動」と呼ばれている地藏院の不動明王像は、通例の不動像とは異なり、髪が追い風に吹かれ靡き、宝剣を振り上げる様から追い風をただけりとして親しまれている。

さらに、鎌倉時代に東大寺南大門の「金剛力士像」を彫刻した仏師として知られる運慶・快慶の流れをくむ仏師が制作したと考えられており、美術的にも歴史的にも非常に価値の高いものである。また、院内にはほかに、推定樹齢600年以上といわれ、川口市指定天然記念物となっているタブノキも備わっている。不動明王像もタブノキも作中に登場してはいないが、見る者を圧倒するような荘厳な風格を感じさせるものであり、見どころの多い寺院である。

2回の訪問では、地藏院へ行くことが叶わなかったため、次回機会があったら訪問したいと思う。

その寺院で見事に2つ目の寶鉄を手に入れた殿は、萌からおにぎりと漬物を渡される。そこで殿は、元の時代では塩辛いと激怒していた漬物を美味しいと感じる。萌との会話から、地域住民の心遣いに気づき始めた殿は、住民との交流を大切にできるようになる。

○ ロケ地巡り4 旧田中家住宅

旧田中家住宅は、川口市にある大正時代に建設された県下有数の本格的洋風住宅で、2018(平成30)年12月25日に川口市初となる国の重要文化財に指定された。いくつもの構造物から成り立っており、洋館は元々、来賓用の建物として建設された優れた外観を呈する壁に化粧用煉瓦を貼り、デザイン性に優れている。正面玄関には帳場と神棚を設け、商家としてのスタイルを残し、2階には洋間の書斎と座敷を設け、洋風を基調としながらも、一部には和風を取り入れたつくりになっている。3階は南側に大広間を設けている。本来応接間は一階に配置するのが通常であるが、旧田中家住宅では眺望を重視して3階に配置したと考えられている。庭園は1973(昭和48)年の改修工事で、味噌醸造蔵の跡地に造営された本格的な池泉回遊式日本庭園である。

また、川口市立文化財センターのYouTubeチャンネルでは、自宅に居ながら旧田中家住宅を体感できる

360度映像によるバーチャルツアーのコンテンツを作成し公開している。これはインターネットを通じて川口市内初の国指定重要文化財建造物であり、川口の歴史と文化を伝える旧田中家住宅の魅力を感じさせることを目的としている。

旧田中家住宅も2回の訪問では行くことが叶わなかったため、次回機会があったら訪問したいと思う。

○ ロケ地巡り5 川口オートレース場

川口オートレース場は、124,561㎡の広大な施設であり、川口市の産業の核の1つとしての役割を担っている。施設には、オートレースが繰り広げられるアスファルトのオーバルコースがあり、レース予想や観覧する観客が多く訪れる。また、川口市の歴代の選手が紹介されている川口オートミュージアムやオリジナルグッズを販売しているストアなどもある。実際に訪問した際には、オートレース場を実際に見学し、その広さに圧倒された。また、レースに出場する選手が待機をする部屋にも案内していただき、少し薄暗い雰囲気を感じる選手ごとの待機部屋を見学した。また、レース場関係者の方から、実際にレースを走るバイクについて、タイヤが細く中心がとがっており、付属品も最低限に減らされたレースに適切な機能のみ取り入れたバイクとなっていることを説明していただいた。実際に、バイクに乗せていただいた際には、120kgある車体を時速100km超えの速さで扱っているという技術力に衝撃を受けた。

『ロード・オブ・ONARI〜未来へつなぐ想い〜』の作中では、グラビア撮影のために各地を巡る『きゅぼらん』を追いかけ、萌と殿、市役所職員の藤枝が川口オートレース場を訪れる。『きゅぼらん』を探す際に、選手が待機する部屋に行き、選手に話しかけるシーンがあり、その際にレース場の裏側や川口オートレースで活躍する埼玉県出身の佐藤摩弥選手¹⁹が登場している。

【写真8：川口オートレース場入口】



【写真9：川口オートレース場内と競走車】



○ ロケ地巡り6 川口市立グリーンセンター

1967（昭和42）年に開園した川口市立グリーンセンターは「日本の都市公園100選²⁰」に選ばれている市営の植物園であり、敷地は15.8haとなっている。入園料は、一般は310円、高校生以下は100円となっている。

「緑化産業の振興を図るとともに、緑地を保全し、市民に憩いの場所及びレクリエーション施設を提供して心身の健康増進に資し、あわせて自然科学知識と教養の向上に寄与すること」を目的として設置²¹された施設の中には、「大集会堂」、「大温室」、「大噴水」、その他、広い花壇と、大きな温室、子どもたちが遊ぶことができる「わんぱく広場」がある。この「わんぱく広場」では、遊具やミニ鉄道駅舎が設置されている他、ミニ鉄道が走っており、実際に乗車することもできる。

【写真10：川口市立グリーンセンター大集会場】



園内には、芝生公園や噴水等の自然が感じられる施設だけではなく、子どもが遊べる遊具やミニ鉄道、また西洋文化を味わうことのできる洋館や食事ができるレストラン等がある。ここでは、自然を楽しむだけではなく、展示会や園芸教室などの様々なイベントも開催されており、人々が集まる憩いの場となっている。実際に施設を散策した際には、まず入場するときれいな芝生が広がっており、中央には大きな噴水があった。

木々が生い茂った森のような場所や、長い滑り台などの遊具、また線路が園内に通っており、体重的には大人も乗れる汽車が走っていた。公園の奥に進んでいくと、洋館と庭園が広がっており、レトロな雰囲気を感じられた。

【写真11：川口市立グリーンセンター大温室】



【写真12：川口市立グリーンセンター大噴水】



『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』の作中では、殿と萌、川口市役所職員の藤枝が『きゅぼらん』を追って、現在は閉館している大温室を走り回るシーンが撮影されている。また、園内を走る汽車に、『きゅぼらん』と『きゅぼらん』を追いかける3人

が乗るシーンもあるが、まだ『きゅぼらん』を捕まえることはできず、次の施設へと移動していく。

(3) 5つの寶鉄を集めたが…

殿と萌は、『御成道伝説』の巻物にあった通り、5つの寶鉄を集め『これで江戸の世に帰ることができる』と考えていた。しかしながら、何も起こらなかった。帰ることができないと悟った殿は、辛い思いをするかと思いきや満更でもない様子。「帰れなくても食べ物は美味しいし、川口の民にも慕われている現代で過ごすのも悪くない。」と吐露すると、殿の『元の時代に帰りたい』との願いで、就職活動で忙しい中、一緒に寶鉄探しの旅をしていた萌は反論。その瞬間、不思議な揺れが起こる。巻物をよく見てみると、そこには『一一七八°一九』という文字が。そこで萌は、『イイナパーク川口²²⁾』に何か秘密があると予想する。

『不思議な揺れ』は、『歴史が変わろうとしている瞬間』として表現されている。殿の気持ちの揺れ動きを物理的な揺れとして表しており、場面の転換が視聴者側としても理解しやすいものとなっている。

少し言い争ってしまった2人。萌はイイナパークで『何百年』先のことを考えて植樹された樹木を見て、目先の就職活動の事ばかりを考えていたことに気が付く。

一方、殿は、川口の街を歩く中で鑄造業を営む人々を見て、『何百年』も伝統を守り続ける姿に感銘を受ける。

このシーンは、それぞれが異なる対象から『何百年先の未来を考えること』の感慨深さを感じており、この映画が時間の流れというものを軸としていることを感じさせられる表現となっている。

○ ロケ地巡り7 イイナパーク川口

イイナパーク川口（赤山歴史自然公園）は、首都高速川口線沿いに面しており、首都圏高速道路川口パーキングエリアに隣接している公園である。この公園は、木々や花等の自然が広がっており、まるで森の中にいる感覚を味わうことができる。そして、中心には大きな池があるため、水辺の景色やそこに咲く植物を楽しむことができる。また、園内には、自然を感じられる広場や池だけではなく、飲食店や川口市の歴史や産業について学ぶことができる歴史自然資料館、川口市の市内物産が紹介されている物産館等の様々な施設が設備されている。

公園の整備は、川口市の市政が始まってから80年もの間、解決し得なかった重要課題に着目し実行に移された施策であった。その内容は、「行政が運営する火葬施設の建設」であり、2015（平成13）年当初に、市営火葬施設の建設を求める14万人の請願が提出され、

実施設計の実現に至った²³⁾ことが契機となっている。その後、2012（平成24）年3月に都市計画²⁴⁾として公園の整備が決定²⁵⁾された。この都市計画決定に至る背景としては、先述した火葬施設の状況に併せ、川口市における公園緑地の状況、計画地の地域特性が挙げられている。公園緑地については、市内に残る緑地の多くが開発圧力にさらされている現状と、当該計画地²⁶⁾が川口市及び首都圏における重要な緑の拠点²⁷⁾として位置付けられているという事実が裏付けとなっている。当該計画地は、豊かな自然環境に恵まれ、近隣には歴史文化遺産を有し、枝ものや植木等川口市農業の中核的存在となっている地域である他に、周辺には観光・集客の拠点があり、道路網や交通インフラの面についても高い利便性を有しているという特性がある。以上から、都市計画において「広域的な集客制に配慮した『水と緑のオアシス空間』の創出」が計画テーマとして決定され、公園整備は地域の振興や都市農業の活性化にも資するものとされた²⁸⁾。そのため、川口市は、首都圏高速道路株式会社との協働によって別途進行していた川口パーキングエリアの整備と一体的に行うことを決定し、地域拠点整備事業「ハイウェイオアシス」とした。公園は2013（平成25）年2月に基本設計が完了し、「自然環境や歴史文化遺産を活用した、地域の振興や都市農業の活性化にも資する公園」・「水と緑に囲まれた周辺環境と調和した火葬施設」がその整備方針²⁹⁾とされた。2014（平成26）年の2月には実施設計が決定され、市は平成29年5月に公園の看板や刊行物に使用するための愛称を公募³⁰⁾、8月に『イイナパーク川口』として決定した。2018（平成30）年には、子ども向け大型遊具（フワフワドーム）、歴史自然資料館、地域物産館を含む公園の一部を開園³¹⁾し、私たちが訪問する直前であった2022（令和4）年4月25日に全面開園した。

【写真13：イイナパーク川口開園ポスター】



イナパークとしての開園後は、高速道路の利用者に潤いのあるスペースを提供するとともに、都市公園等の利用増進が図られている。範囲内に設けられた資料館では、川口市の歴史等を外部の人たちにも伝える工夫が施されている他、隣接した土産店には、川口市の地場産業である鋳物も展示されており、高速道路から降り立った人々が川口市の文化に触れられる都市施設となっている。

訪問した川口ハイウェイオアシスは、広々とした緑が多い空間で、パーキングエリアでありながら身近な公園という印象を受けた。居心地の良い空間で、併設のショップも平日ながら多くの客でにぎわっていた。緑豊かな広場の開放感が非常に心地よく、天候の望ましい日に改めて訪問したい。また、川口ハイウェイオアシス内には屋内遊具施設「ASOBooN(アソブーン)」も併設されており、子ども連れの利用者も多くみられた。歴史資料博物館では、過去の日光御成道まつりの資料映像を視聴することができた。たくさんの人々が武士や姫、従者等々に扮し、市内を闊歩している様子が映し出されており、祭りの盛況具合を知る事ができた。また、ジオラマや写真等で川口市の歴史・文化・自然について展示されており、川口ハイウェイオアシスと連結していることで、市民が改めて川口市について知り得る憩いの場となっていると感じた。火葬施設も敷地内から見える範囲にあったものの、景観に配慮された外観をしていた。

【写真 14：イナパーク川口案内板】



『ロード・オブ・ONARI I～未来へつなぐ想い～』の作中では、イナパーク川口は、園内の道で萌と歴史自然資料館の学芸員が会うシーンのロケ地となっている。

園内の道を萌が考え事をしながら歩き、未来のために植えられている木々をみて何百年後のことについて想像する。その道中で、園内にある歴史自然資料館の学芸員に遭遇し、寶鉄を分析してもらえる方を紹介してもらい、寶鉄の正体の解明を目指す。

(4) 殿、いよいよ江戸の世へ

イナパーク川口に到着した萌は、手にしていた寶鉄に興味を示す歴史自然資料館の学芸員から、日三鋳造所³²へ向かうように促される。

一方、川口の街を歩いていた殿は、『カンカンカン』という聞き覚えのある甲高い音が鳴る日三鋳造所に引き寄せられ、萌と再会する。

そこで、日三鋳造所の職員から寶鉄の正体が『ベーゴマ³³』であることを知り、御成道伝説の巻物に書かれていた『五つの寶鉄を集めそれを正しく使うべし』の意味を『5つのベーゴマを同時にぶつけ合うこと』だと解釈した。しかしながら、鋳造所の職員から鑄び方が激しいこの5つの寶鉄は、ベーゴマにすることが難しいと伝えられる。

再び困難に遭遇した2人は、川口市役所の屋上にてお互いに言い過ぎてしまったことを反省するとともに、萌は殿が江戸の世に帰ることができない可能性があることに不安を募らせる。

一方、殿は、『江戸時代より平和なこの時代に生きていくようになって良い。』と、江戸の世へ帰ることを諦めかけていた。するとその時、不思議な感覚に襲われた。またもや『歴史が変わりかけている瞬間』が訪れたのである。

萌に連れられ、2人は富和鋳造株式会社³⁴へ。殿は萌から、川口市の漬物は年中暑い鋳造工場働く人たちのために昔から塩辛く作られていることを教えられる。殿が江戸の世では塩辛いと感じていた漬物が、現代の世では美味しく感じられているのは、川口のみんなを笑顔にするために働き、たくさん汗をかいていたからだと伝えられた。殿から萌へも感謝が伝えられ、お互いに称えあった。

殿を江戸の世へ送り出すため、川口市役所には伊奈課長によって集められた、川口が誇る職人たちの『ドリームチーム』が結成された。鑄びた寶鉄は酸化還元反応により、川口市の市章が入ったベーゴマに変身した。殿はベーゴマ大会の優勝者である子どもたちに、ベーゴマの回し方を伝授してもらった。

こうして準備が整えられ、錫杖寺にて殿を江戸の世へ送り出す日がやって来た。現代の川口でお世話になった人々が集結し、殿は「川口の民よ、本当にありがとう。どうか笑顔で送ってくれ。」と感謝を伝えた。殿が江戸の世へ帰ることに涙ぐむ萌に、「川口は萌に任

せよう」と殿は勇気づけた。5つのペーゴマが回った瞬間、殿は江戸の世へ帰還した。400年前の錫杖寺へ着くや否や、現代の川口で香の物の魅力を知った殿は、塩辛いと嘆いていた香の物を口にし、家臣たちを驚かせた。「香の物は美味しい。これからも錫杖寺に寄りたい。」と伝え、巻物を書き記しペーゴマを土に埋めた。

○ ロケ地巡り8 株式会社日三铸造所

株式会社日三铸造所は、1953(昭和28)年から続く現在国内唯一のペーゴマを専業とする製造工場である。川口市は、街沿い荒川を流れる荒川周辺で鉄を流し込む「砂型」に使うための良い砂が採れたことから、鋳物の街として繁栄してきたが、住居が増加したことに伴う環境問題により、多くの工場が閉鎖や移動をした。日三铸造所も一度は自社工場を閉鎖したものの、ペーゴマを愛する方々からの要望により、現在は古くから親交のあった河村铸造所に委託し製造を続けている。また、市の郷土資料館内にあるペーゴマ資料館では、大正時代のものや、記念につくられた限定品など、約500個ものペーゴマが展示されており、対戦台やコマのカスタマイズ用の鑪なども用意されている。

株式会社日三铸造所も2回の訪問では行くことが叶わなかったため、次回機会があったら訪問したいと思う。

○ ロケ地巡り9 富和铸造株式会社

川口市には、鋳物の原料となる鉄を溶かす溶解炉「キューボラ」をモチーフとした『きゅぼらん』というマスコットキャラクターがいる。現在このキューボラを見ることができる工場は数箇所となっており、富和铸造株式会社はそのうちの1つである。富和铸造株式会社は、下水道のパイプや産業機械等、様々な鋳物を製造している企業である。川口のものづくりをリードする高い技術力を誇っている。この工場では、幕末には津軽藩から依頼を受けて18ポンドカノン砲を製造したのだという。現在でもこの大砲の復元品を見ることができ、観光スポットの1つとなっている。

鋳物は川口市の地場産業である。鋳物とは、高温で溶かした金属を砂で作った型の空洞部分に流し込み、冷やして固めた製品のことで、現代でも様々な場所で活用されているものである。この鋳物を製造する際の液状にした鉄を鋳型に流し込む注湯という作業は1日に数回しか行われぬ作業で、私たちが訪問する時間帯に行われるように調整していただき、実際にこの作業を目近で視察させていただいた。

作業を見学させていただいている間に、この工程では「成分調整と温度管理」が材質における直結ポイントであるため非常に重要であり、長年の作業の中で成功率が高くなるように情報収集を行い、ノウハウを磨

いてきたのだと伺った。中でも特に温度調整については、クレーンの操作テクニックやスピード感、チームワークが重要となってくるものであるため、危険な現場であるが機械化されることなく今でも人の手で行われているということを知ることができた。注湯を見学させていただいた後は、工場前に設置されている大きな鉄球についてのお話を現代の名工³⁵の称号を得られている方に伺うことができた。その鉄球は以前、地上波で放送されていたバラエティー番組『ほこ×たて³⁶』にも出演しており、「どんな物でも破壊する鉄球」シリーズにて、大きな鉄球をつくり、絶対に壊されない硬い壁などを破壊することができるか検証する企画に挑んでいる。この企画に出演したことにより、高い技術力を全国に証明している。実際に、この企業を訪問した際には、高い天井の工場で、地面には火が燃え移らないように砂が敷かれていた。また、実際に金属を流し込む作業を見学し、目の前で火花が飛び散る光景に迫力に圧倒された。また、番組で使用された実物の鉄球も展示されており、想像していた以上に大きな鉄球だった。

【写真15：富和铸造株式会社での作業の様子】



『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』の作中では、萌と殿が工場に訪れ、金属を流し込む作業を見る姿が撮影されており、今までの殿がしてきたことを振り返る感動的なシーンである。工場内で働く方々の滝汗を流して作業していることにも注目されており、塩辛い漬物が汗を流す人のために作られた食

べ物であることを知る場面でもある。また、寶鉄をペーゴマにする作業にその高い技術力を生かして協力していく。

(5) 萌のこれから

ここからは、最後の萌が空を見上げるシーンに隠された背景を推測する。

作品内で幾度か萌が就活に対する悩みを抱いている場面が見受けられたことや、殿との別れのシーンでも萌の就職先についての会話や、最後に萌が何か吹っ切れたような表情で歩き出すシーンがありながら、その具体的な就職先について言及されていなかったため、私たちが作品を鑑賞して考察した萌の就職先について、2通りの考察を紹介する。

まず1つ目が、川口市内で民間企業に就職したのではないかという考察である。最後の殿との会話の中で、殿が「ではこの川口は萌殿に任せようかな」と述べており、それに対して、萌が「殿に任せられたらしょうがないね」と頷いていたことから、当初志望していた東京ではなく、川口市への就職を考えているのではないかと推測できる。加えて、萌はプロデューサーへの興味を口にしており、川口市役所職員である藤枝との交流の中で、憧れていた仕事と藤枝が行っている仕事が似ていて身近にあると感じていることや、藤枝からプロデューサーとして見てもらえる場面もあることから、市内でプロデューサーに関連した仕事に就職したのではないかと考えられる。また、川口市に貢献したいということであれば市役所職員を目指すという解釈もできるかもしれないが、最後に歩き出す場面のなかで、萌が川口市役所とは反対の方向に歩み出していることから、川口市役所ではないところへ就職したのではないかと考えられる。

そして、2つ目が、川口市外で就職したのではないかという考察である。5つの寶鉄を探し、殿が元の時代へ帰るための方法を考える過程で、川口市の様々な住民や産業にふれる中で、川口市への思いが強くなっていることが見受けられる。しかしながら、最後の殿のセリフに「人々と共に汗を流した後の酒と飯はどんな馳走よりうまい。なあ萌よ。」とあり、萌はそれに応えるように笑顔を見せている。これは、萌も人々と共に何かをやる事を楽しんでいたという事になるのではないかと考える。また、殿に協力してくれる人を集めるためのプロデュースを、自身も気づかないうちに行っていたという場面から、人に何かをしてあげる能力に長けていると感じる。このことから、川口市への想いよりも人助けへの想いの方が強いように感じられたため、就職先は川口市には限らないのではないかと考えられる。

以上が私たちの考える萌の就職先に関する考察である。もちろん上記の2つだけではなく、そもそも萌はまだ就活中なのではないか等、様々な解釈が考えられ、見る者に考えさせる要素として非常に魅力的である。

作品内で取えて萌の就職先について言及しなかったのは、住民たちと交流する前は「こんなまち出てって、東京で就職する」と言っていた萌が、川口市で様々な交流や人々の思い、仕事を体験する中で、気持ちの変化や自分の本当にやりたいことを見つけていくという姿のように、身近な地域にしっかりと目を向けて、自分の歩む道を探せという製作者から私たち鑑賞者へのメッセージかもしれない。

おわりに

本稿では、殿と萌との川口市内の冒険に触発された学生たちの川口市への旅を扱った。

訪問した学生たちは、2年生、3年生であった。自分の就職先をどうするのか、まさに本作の萌と同じ立場である。そのため、ラストシーンについて色々と考えたようである。

このように、はっきりとは言及されていないが、恐らくここではこうなっているだろうと語り合うことが私(佐藤)の研究室で行っている作業である。時には自分と、時には自分が住んでいる街と、時には自分の知っている誰かと、作品の中の登場人物や場所を結びつけて、自分だったらこう考える、自分はこう感じた等に根拠を添えて発表し、意見を言い合う。正解は、制作者しか知らない、ひょっとしたら、制作者すら知らない、そんな正解のない問題の議論を楽しく目を輝かせながら行っている。

今回は、たまたまお薦め欄に掲載されていた映画を契機に、学生たちは大冒険をしたと思う。

この『ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い～』という作品に出逢えたことに感謝するとともに、この作品に関わったすべての人に改めて感謝したいと思う。

また、作品を視聴したので作品についていろいろ教えて欲しいという、ある意味遠方からの無理難題に真摯に応え、日々の業務でお忙しい中、2回の訪問で、ロケ地巡りの計画から案内まですべて対応していただいた川口市産業振興課の職員のみなさまにはどんなに感謝しても感謝し尽くせない気持ちでいる。

最後に、私のよく知る川口市のさらに本当の姿を見る機会をくれた研究室の学生たちにも感謝したいと思う。

註

- 1 これまでの代表的なものについては、佐藤匡＝神谷和宏「メディアを読み解くカーウルトラマンを題材に」『昭和大学富士吉田教育部紀要【第8巻】』（2013年、昭和大学富士吉田教育部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の視座－『ウルトラ』シリーズを題材として」『地域学論集【第12巻第3号】』（2016年、鳥取大学地域学部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の実践－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年2月）－」『地域学論集【第13巻第1号】』（2016年、鳥取大学地域学部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の意義－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－」『地域学論集【第13巻第2号】』（2016年、鳥取大学地域学部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の手法－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2016年8月）－」『地域学論集【第13巻第3号】』（2017年、鳥取大学地域学部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の挑戦－『ウルトラ』シリーズを題材として in 鳥取大学（2017年1月）－」『地域学論集【第14巻第1号】』（2017年、鳥取大学地域学部）、佐藤匡＝神谷和宏「メディア研究の発展－『シン・ゴジラ』を題材として in 鳥取大学－」『地域学論集【第19巻第3号】』（2023年、鳥取大学地域学部）を参照。
- 2 2回の訪問については、佐藤匡ほか「住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり－浜村の活性化に向けた川口市視察－」『地域学論集【第19巻第1号】』（2022年、鳥取大学地域学部）及び、佐藤匡ほか「続・住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり－川口市と川越市の比較調査－」『地域学論集【第19巻第2号】』（2022年、鳥取大学地域学部）を参照。なお、本稿の執筆者である清水愛結・早川幸来・山根舞夕については、2回とも訪問しているが、前者には執筆参加をしていない。小淵蒼真・藤田翔大・吉野敬悟については、研究室未入室だったため2回とも訪問していないが、研究室入室後に本作品の視聴をしている。
- 3 この映画は、川口宿、鳩ヶ谷宿、川口市経済部産業進課内日光御成道まつり実行委員会の製作、Megu Entertainmentによる企画、C.A.Lによる制作、XCREA/ヨーロッパ企画による協力によって作成された。
<http://road-of-onari.onarimichi-matsuri.jp/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 4 本当に住みやすい街大賞は、理想ではなく、実際にその地域で「生活する」という視点からアルヒ株式会社のサービス利用者の膨大なデータをもとにランキングを作成したものである。住環境、交通の利便性、教育・文化環境、コストパフォーマンス、発展性の5つの基準を設定し、住宅や不動産の専門家が参画する選定委員会による公平な審査のもと「本当に住みやすい街」を選定している。
https://www.aruhi-corp.co.jp/ep/town_ranking/ (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 5 川口市視察当日配布資料参照。表1は、当日配布資料を基に作成。「あいうえおのまち川口」と称して、市の特徴や特産品を紹介している。
- 6 2回の訪問の概要については、註2前掲論文を参照。
- 7 川口宿 鳩ヶ谷宿 日興御成道まつり実行委員会YouTubeチャンネル内『【無料映画】ロード・オブ・ONARI～未来へつなぐ想い』を参照。
<https://www.youtube.com/watch?v=ny1kXH1Wso> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 8 宝珠山錫杖寺公式サイト
<https://www.shakujouji.jp/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0> (2023年6月5日閲覧及び確認)
- 9 「浮間わいわいねっ」とを参照。
<http://www.ukima.info/meisho/kawaguti/shakujyo/hondo.htm> (2022年6月3日閲覧及び確認)
- 10 ニッポン旅マガジン『錫杖寺』参照。
<https://tabi-mag.jp/sa0162/> (2022年6月3日閲覧及び確認)
- 11 宝珠山錫杖寺公式サイト内「学びの365日」参照。
<https://www.shakujouji.jp/%E9%8C%AB%E6%9D%96%E5%AF%BA%E3%81%AE365%E6%97%A5/%E5%AD%A6%E3%81%B3%E3%81%AE365%E6%97%A5> (2022年6月3日閲覧及び確認)
- 12 管崎山地蔵院の公式サイト参照。
<https://www.jizouin.or.jp/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 13 大正時代建設された埼玉県川口市にある歴史的な建造物。2018年に川口市内では初の重要文化財に指定された。
<https://tanakatei.jp/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 14 新芝川に架かる鳩ヶ谷大橋とその周辺の区域。
- 15 『きゅぼらん』は” 鋳物のまち” 川口を象徴する溶接炉「キューポラ」をモチーフにした川口市のマスコットキャラクターである。
<https://1110city.com/cupolan/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 16 川口オートレース場 1952年2月に開設された埼玉県川口市にあるオートレース場である。売り上げ、入場者数ともに全国5場のオートレース場内で1位を誇っている。
<https://www.kawaguchiauto.jp/> (2023年6月5日閲覧及び確認)
- 17 グリーンセンターは1967年11月に「グリーンセンター川口市立植物園」という名で開園された埼玉県川口市新井宿にある植物園である。
<http://greencenter.1110city.com/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 18 西川口は、かつて風俗街として有名な街であったが、2006年に改正風営法が施行されて以降、空きテナントが続出し、この空きテナントに新華僑が経営する飲食店が参入したことで『西川口チャイナタウン』が形成された。
http://ciriec.com/wp/wp-content/uploads/2020/12/INTERNATIONAL_PUBLIC_ECONOMY_STUDIES_No31_3-1.pdf (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 19 佐藤摩弥選手は埼玉県さいたま市出身の川口オートレース場所属の女性オートレース選手である。
https://autorace.jp/race_info/Profile/9002 (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 20 1989年に社会財団法人「日本公園緑地協会」により選ばれた都市公園の100選である。都市公園とは都市内に存在する公園のことで、地域の住民に緑や憩いの場を提供することを目的として運営されている。
<http://j100s.com/toshikouen.html> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 21 「川口市立グリーンセンター」看板参照。
- 22 イーナパーク川口は2022年4月に川口PAの設備増強に伴い連結した、首都高速道路初のハイウェイオアシス（高速道路の休憩施設と都市公園などを一体的に整備し、高道路の利用者に潤いのあるスペースを提供するとともに都市公園などの利用増進を図る施設）である。川口ハイウェイオアシス公式サイト

- <https://www.kawaguchi-highwayoasis.com/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 23 前川口市長である岡村幸四郎氏が現職4期時点で立候補した市長選において、立候補者の街頭演説として応援演説を行っていたその内容に「市営火葬場の建設」に係る請願とその実施計画について触れられている。まっすぐ進む！川口市議会議員松本すすむのWebページ内「川口市長選挙で応援演説を行う（5月15日）」参照。
<https://www.komei.or.jp/km/kawaguchi-matsumoto-susumu/2013/05/20/%E5%B7%9D%E5%8F%A3%E5%B8%82%E9%95%B7%E9%81%B8%E3%81%A7%E5%BF%9C%E6%8F%B4%E6%BC%94%E8%AA%AC%E3%82%92%E8%A1%8C%E3%81%86%EF%BC%88%EF%BC%95%E6%9C%88%EF%BC%91%EF%BC%95%E6%97%A5%EF%BC%89/> (2022年6月3日閲覧及び確認)
- 24 埼玉県川口市旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム「都市計画公園の変更及び都市計画火葬場の決定について（平成24年3月）」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01130/090/project/4080.html> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 25 川口市市長室広報課「広報かわぐち（2014年2月号No781）」（2014年埼玉県川口市役所市長室広報課）参照。
- 26 川口市提示の公園・火葬施設の整備は川口市神根地区の赤山及び新井宿の地域の約8.9haを範囲としている。川口市「都市計画公園の変更及び都市計画火葬場の決定について（平成24年3月）」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/gaiyou.pdf> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 27 良好な自然環境を有する緑地の保全に関し必要な事項を定めることにより、近郊整備地帯の無秩序な市街地化を防止し、首都圏の秩序ある発展に寄与することを目的とする「首都圏近郊緑地保全法」に基づく安行近郊緑地保全区域として設定されている。国土交通省『「首都圏近郊緑地保全制度」について』参照。
<https://www.mlit.go.jp/singikai/kokudosin/shuto/7/images/shiryou6-3.pdf> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 28 川口市都市計画部赤山歴史自然公園整備室旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム「ハイウェイオアシス整備に至る経緯」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/keii.pdf> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 29 川口市都市計画部『赤山歴史自然公園整備室旧歴史自然公園火葬施設整備室火葬施設整備事業「(仮称)赤山歴史自然公園及び(仮称)川口市火葬施設の基本設計について」』参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/material/files/group/122/kihonnsekkeisiryou_01764442.pdf (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 30 埼玉県川口市旧歴史自然公園事業等プロジェクト・チーム（平成22年10月1日～24年3月31日）内「赤山歴史自然公園の愛称が決定しました（平成29年8月）」参照。
<https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01130/090/olddivision/5/3742.html> (2023年6月3日閲覧及び確認)
また、同内容は産経新聞にも掲載された。産経新聞『「イイナパーク」をよるしく川口『赤山歴史自然公園』の愛称決まる』（2017年9月18日）
<https://www.sankei.com/article/20170918-W2YMJQB3NVLV5HU2VXFEOJGLE4/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 31 川口市市政情報街づくり・都市計画赤山歴史自然公園整備事業「イイナパーク川口の整備の進捗状況について（令和2年11月）」参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/shiseijoho/machidukuri_toshikeikaku/8/37157.html (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 及び確認)
- 32 1953年2月に設立された日本で唯一ベーゴマを製造する鑄造所である。
<http://www.beigoma.com/> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 33 ベーゴマとは平安時代に京都の周辺で、始まったとされている。当時は貝殻に砂や粘土を詰めてそれを子どもがヒモで回したのが始まりとされている。
<http://www.beigoma.com/rekishih.html> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 34 富和鑄造株式会社は1946年8月に設立された埼玉県川口市に本社を置く鑄造製品を製造する日本の企業である。
<http://www.tomiwachuzo.co.jp/index.html> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 35 「現代の名工」とは、「技能者の地位と技能水準の向上を図るために設けられた、卓越した技能者表彰制度に基づき、厚生労働大臣によって表彰された卓越した技能者（卓越技能者）の通称」である。富和鑄造で案内をしてくださった方は、「長年、鑄造一筋に技術・技能を極め、高品質の大物鑄物の安定製造は高い評価を受けている。また、精力的に技術・技能の継承のため、後進者の育成に尽力している」という技能功績が認められ、表彰された。厚生労働省「現代の名工」参照。
<https://waza.mhlw.go.jp/gendainomeikou/index.html#:text=%E3%80%8C%E7%8F%BE%4%BB%A3%E3%81%AE%E5%90%8D%E5%B7%A5%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%AF,%E9%83%A8%E9%96%80%E3%81%AE%E6%8A%80%E8%83%BD%E8%80%85%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82> (2023年6月3日閲覧及び確認)
厚生労働省「第1部門 金属材料製造の職業等」参照。
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/11/tp1109-1a.html#dai01> (2023年6月3日閲覧及び確認)
- 36 フジテレビで2011年から放送されたバラエティー番組。矛と盾に関する故事「矛盾」にちなみ相反するもの同士を争わせ決着をつけて白黒ははっきりさせることが趣旨の番組である。